

平成25年12月7日（土） 13:40～14:40

北日本新聞ホール

「古代環日本海の交流と衣服」

講師 大阪大学大学院文学研究科教授 歴史学者

武田佐知子 氏

富山の皆さん、こんにちは。私と富山の関係は、今から四半世紀前にさかのぼります。1987年に、そのころはまだ富山市が主催していた日本海のシンポジウムにお招きいただいて、森浩一先生、大林太良先生、門脇禎二先生という、そうそうたるメンバーに混じって報告させていただいたのですが、私もまだ若かったので、500人の観衆の前で報告をしたのは初めてで声が震え



まして、後で森先生から「声が震えていたぞ」と冷やかされた覚えがあります。年を経てすっかり肝が据わりまして、今日はまだ声は震えていないかと思います。

私は、そのころ以来、随分何度も富山にお伺いしているのですが、富山は食べ物がおいしい。鱒寿司も好きなのですが、私の一番好きなのは白えびで、昨日も白えびの唐揚げを食べさせてもらいました。一番好きなのはもちろん白えびのお刺身で、築地のお寿司屋さんでも白えびが入ると必ず食べます。それから、富山の帰りには必ず空港で白えびの昆布締めを買っていきます。大変食い意地が張っていて、富山に来たら、やはり氷見へ行ってブリを食べないといけないということで、2006年か2007年に、車を出してもらって氷見までドライブしたことがあります。そのときに、大変衝撃的な経験をしたのです。

国道8号線沿いは、中古車のお店がずらっと並んでいて、しかもお店の看板が、ロシア語は分かるのですが、もう一つは訳の分からないアラビア文字のような文字で書いてある。聞いてみるとウルドゥー語だそうで、お店はほとんどパキスタンの方が経営しておられるので、ウルドゥー語の看板がたくさん並んでいるんだそうです。ここは本当に日本なのかと思うぐらい、大変ショッキングな光景でした。ゴルフの練習場もほとんど中古車で埋め尽くされ、沿道の水田があったところも埋め立てられて、中古車の展示場になっています。BMWなど、新車の外車を展示しているお店もたくさんあったのですが、それが中古車のお

店に隠れてしまって影が薄くなっているという状況を見ました。

ロシア人が自転車に乗って中古車市場を見て歩いているのも見掛けて、ロシアの方々が日本車を大変たくさん買っていたらいいのだということを知ったわけです。後で状況を聞きましたら、ロシアの方にとっては、2台までは携行手荷物で自動車を持って帰れるのだとのこと。なるほど、ロシア人は大きいから、手荷物で車が持って帰れるのかなと思ったりもしました。その後、県の方とお話すると、私は当時は大阪外大にいましたので、富山県にウルドゥー語の人が欲しいと。なぜかという、パキスタン人の中古車ショップに強盗が入ったり、彼らはお金を銀行に預けないで現金で保存しているので、それを狙って強盗事件が起こったりということで、通訳のできる人が欲しいのだという話もあったほどなのです。聞きましたら、今ではその光景は全く様変わりしていて、ほとんど中古車ショップと外国語は見えなくなっていました。これはロシアの税制が変わった事情によるのだそうですが、2006～2007年は、ロシアへ24万台というものすごい数の中古車が売れていたころだそうです。私自身は、富山が日本海を通じて本当に国際的な都市なのだということを肌でもって感じる衝撃的な体験をしたわけです。

1. 日本海の交通

そうした富山での国際性の体験があるのですが、四半世紀前に一度富山にお招きにあずかった次は、2001年、大阪で行われた日本海シンポジウムに参加させていただきました。そのときは、文化庁長官になられた青柳正規先生、イリノイ大学のロナルド・トビさんらと一緒に日本海を論じたのですが、私はそのシンポジウムの前日までパリに出張があり、エールフランスで日本へ帰ろうとしていました。日本が近づくにつれて、機内の画面に示されたのは、まさに富山県が創始して非常に普及に努めておられる日本海の逆さ地図だったのです。ロシアの上空を通ってくるときには、この地図が日本への接近方法を一番うまく示してくれる図で、まさに日本海が湖のように見えて、海は隔てるものではなく、つながりものであるというイメージが強烈に、鮮烈に感じられました。そのときに私が考えたのは、石母田正という高名な歴史家が、ギリシャの文明を支えたのはエーゲ海であり、エーゲ海の交通がギリシャの文明を育んだのだとおっしゃいましたが、まさに日本海の交通が日本の文明を育んだのだ、環日本海の文明というのはここで生まれてきたのだということを実感したときでもありました。

その後、私は、『万葉集』などに五島列島の海人たちのネットワークの存在を感じさせる歌がたくさん出てくるのですが、そうした海人たちのネットワークが日本海の交通を支え、それが後に中世には倭寇にもなっていくのだろうということを考え、古代の五島列島の海人たちのネットワークについての論文を書いたこともあります。富山県が創始された日本海逆さ地図は歴史家からの評価が大変高く、網野善彦さんも激賞されています。

そして、教科書に取り入れられるようにもなりました。日本文教出版は中学校社会の教科書の中で、「地図を読み直す」という項目に「大陸から見た日本」という見出しで逆さ地図を採用しています。この逆さ地図の視点から見ると、日本海の海を通じて取り入れられた中国あるいは韓国の先進文明の影響が見受けられます。島根県の米子市にある西暦600年代にできた上淀廃寺という寺院から二極彩色の壁画の断片が出たのですが、これは法隆

寺金堂の壁画にも匹敵するもの
だとして大変高く評価されてい
て、その復元が進んでいます。

この地域に、何故にこうした
寺院が造られたのかという
と、これは日本海の交通を考え
なければいけないわけです。昔、
この地域には砂州が発達して、
潟湖（ラクーン）という一端が海
に通じている地形が形成され、
上淀麿寺はその周辺に造られま
した。それから、ここには妻木
晩田遺跡という弥生時代の日本
最大とも言われる高地性集落が
できています。その東にある稲
吉角田遺跡からは、1.5m もある

大変大きな土器の破片が出てき
ました。その表面には絵が描かれており、非常に興味深いことに、まさに淀江町のラクーンを通じて交流する人々の様子が描かれていました。
高いはしごを掛けた建物があり、その横に、建物にこぎ寄せる船が描かれています。船に乗っている何人かの人物は、一様に頭に大きい飾りを付けています。これは羽根飾りではないかと言われていますが、この人々は少なくとも戦いを挑みに建物の方に向かっていてのではないということが伺えるのではないかと思います。

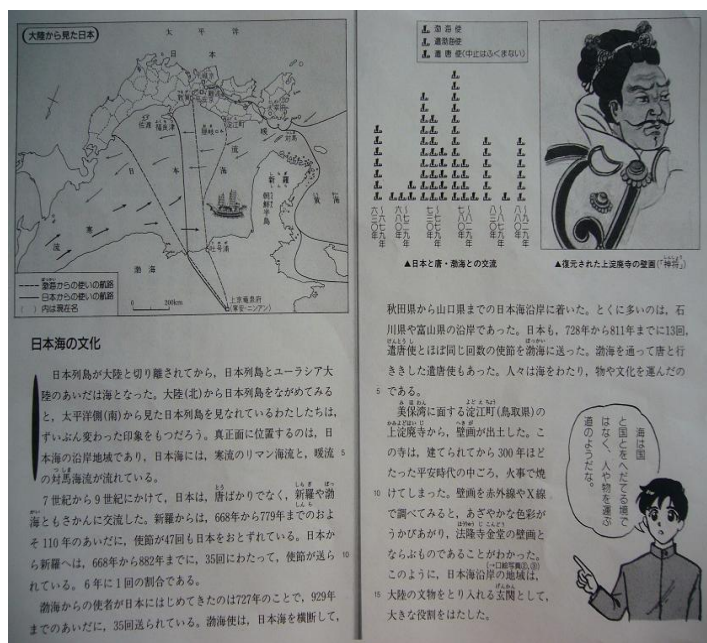


淀江平野の潟湖と妻木晩田・角田遺跡



角田の土器絵画

日本海側には、こうした高く設計された建物がたくさん出ていますが、こうした建物は恐らく日本海の交易を理由に設定されたものではないかというのが、私の考えるところです。日本海の港の特色としては、日本海の荒波を避けて川の河口に造られる港が多いことがあります。もう一つは、淀江の絵の例で示したように、砂州の内側に海が入り込んでい



日本文教出版刊 『中学生の社会科』「歴史」「地図を 読み直す」の頁

て、その穏やかな海を港にするということです。このように、日本海の港というのは、河口港か潟湖（ラクーン）に設定されることが多いということが特徴として挙げられます。

そうした日本海の港の特色を一番大きく語ってくれるのが、古代の「斉明紀」です。それらがどういう意味付けで設定されたのかを考えていきたいと思います。江戸時代末、1804年にレザノフが日本と通航を求めようとして、漂流民を乗せて長崎にやって来て通商を求めるのですが、長崎に追い返されてしまいます。レザノフはほうほうの体で逃げ帰り、日本とは武力行使をするしかないと言いました。ロシアは日本と戦う前に、サハリンに住んでいるアイヌに会いました。サハリンのアイヌたちは、それまでは日本と通商を持っていたのですが、彼らの間に割って入って、ロシアがサハリンとの交易権を得るという歴史の経緯があります。

私が大阪外大時代に教えていたロシアからの留学生クリモア・オリガさんが、ロシアの国立海軍文書館に所蔵されていた未公開資料を翻訳した中に、前近代の民族間の交渉を非常に端的に表してくれる史料がありましたので、それを引用します。ロシアは日本と交渉を絶たせるためという下心があったものの、言葉の通じないサハリンのアイヌたちを懐柔するためにロシアがどういうことをしたかが書かれています。

1806年7月、「私とカルピンスキー海軍中尉は、我々は彼らを恐れてはおらず、彼らに危害を加える事もないということを納得させるために、銃を置いて、彼らのテントに向かった」。彼らのテントはたくさんあったのですが、「島民は、我々を一番高いところに在った最大のテントに連れて行った」。これは恐らく見晴らしのいい場所にあり、アイヌの人々みんなから見渡せるところだったと思われます。そして、ロシア人たちはアイヌの人々に、外套やビーズ、はさみ、リボン、たばこなどをプレゼントします。彼らはそれを大変喜びました。さらに、アイヌの人々にロシア料理を食べさせたという記述が出てきます。そうしてさまざまなものをあげた見返りとして、彼らは自分たちの使用人に村の人と物々交換をするよう命じたのですが、村の人たちはラッコのしっぽの毛皮二つしか持っていなかったのです。アイヌ人は一生懸命、身振り手振りで、なぜ二つしかないかという、日本人が残りの宝物を全部持っていったしまったからなのだと訴えたわけです。

この何ということもない記事から、私たちが何を読み取るべきかということ、まず、言葉の通じない人々との間にどう信頼関係を獲得するか。非常に料理が大事である、つまり、宴会が大事であるということが入っております。また、さまざまなロシアの社会にしかないものを彼らに提供して、彼らの歓心を買うということです。彼らが一番欲しいのはラッコの毛皮です。日本もロシアもラッコの毛皮が欲しかったようですが、それはもう彼らの手元にはなかったということが書かれています。そして、こうした一種の交易が平和裏に行われるためには、それが誰の目にも明らかなように、ロシア人とアイヌ人の全ての人々にとって、お互いの行為が確かめられるような位置でされなければならない。ですから、一番高いところにある最大のテントでそれが行われたとなっているわけです。

2. 環日本海にそびえる大型建造物の役割

古代日本海には、先ほどの淀江の例で見たような、あるいは出雲大社もそうだったと考えているのですが、数々の大型建物が存在していました。実は、それらは環日本海の諸民族の交易のためのランドマークタワーとして建てられた一種の世界貿易センターではなか

ったかと考えています。一番端的な例として、新潟の例を挙げてみたいと思います。新潟に関しては、非常に面白い記事が『日本書紀』に出てきます。

大化3年と4年に越国に淳足柵と磐舟柵が造られたという記事です。この淳足と磐舟というのは、恐らく蝦夷対策で建てられた城柵であると考えられますが、淳足柵については「造」という字が当てられていますし、磐舟柵の方には「治」という字が当てられている。このことから、淳足柵というのは、非常に大規模な造営工事を必要とした大規模建物であったのではないかと推定できます。そのことをこれから徐々に証明していきます。大化元年、越国が中央に上申して言うには、「海畔に枯査あり、東に向かいて移り去る。沙上に跡あり。耕田の状のごときなり」とあります。枯査というのは浮き木といい、水に浮かべた木です。つまり、海辺にたくさんの材木が浮かんでいて、それが東に向かって移動していった。その跡がくっきり砂の上に残っていたということです。

古代の田んぼというのは条里制で整然と区画されていました。その田んぼのような跡が、材木を運び去った後の砂の上に見えたということなのですが、材木の移動は何に伴ってなされるのかというと、恐らくこれは淳足柵を造営するために木材を運んだことを意味したのではないかと考えられます。この淳足柵というのは、養老年間には「淳足城」と呼んだように、建築構造の上で「城」という字が使われていて、大変大規模な建物であつたであろうことが推定でき、造柵する材木の移動が書かれたということは、それが非常に大規模建物であつたということにつながっていくと思います。

大化2年にも同じような記述があります。「越国の鼠が昼夜相つながりて、東に向いて移り去る」という記述です。ネズミが移動するというのは、一体どういう事態を指しているのか。このネズミの移動については、大変面白い史料が別にあります。難波宮への遷都のときに「難波の長柄豊崎の宮に遷都す。老人ら相言いて曰く、春より夏に至りて鼠難波に向かう、遷都の兆しなり」という言葉が出てくるわけです。つまり、難波宮への遷都をネズミが難波に向かうといった事象と結び付けて、その前兆だと言っているわけです。

ネズミの移動と遷都が関係あるというのは、既に中国の『北史』の「魏本紀」の中に出ていて、魏の都が移るときに、同じようにネズミが移動したという記事があります。このネズミの移動というのは、実は『日本書紀』の「孝徳紀」に集中的に見られます。先ほど言いました難波宮への遷都のときと、難波宮から大和へ帰るとき、孝徳天皇だけを置き去りにして、中大兄は斉明天皇と間人皇后、大海人皇子の全員を引き連れて大和へ帰ってしまったという事件があります。ここでも、大和に向かってネズミが移動する。つまり、難波から大和への遷都の記事にネズミの移動が結び付けられているわけです。なぜネズミと遷都が関係あるかということ、遷都というのは非常に大規模な造営工事を伴う大事業です。そうした大事業というのは、人間の移動でもあるのですが、そうした重大事件に関わって登場するネズミの行進が、他でもない淳足柵の造営に対して取り沙汰されたというのは、恐らく淳足柵の造営規模が難波宮の造営にも匹敵するようなものとして人々に意識されたからではないかと考えています。

恐らく淳足柵は対蝦夷戦略として造られたものですが、一体どういう姿をしていたのか、淳足柵は日本海から見たらどう見えるだろうかということを知りたくて、私はあるとき佐渡島から新潟に向けての船に乗ったのです。船でかっぱえびせんなどを出すとカモメが食べに来るのですが、次第に新潟の陸が近づいてきます。そこで最初に目に入るのは、朱鷺



メッセという信濃川の河口の中州に建築された高さ 126m の建物で、環日本海で一番高い建物と言われていました。その朱鷺メッセの上から新潟市内を見ますと、確かずっと川が入り込んでいて、ここに万景峰（マンギョンボン）号もつながれる埠頭（ふとう）も見えていました。そういう大規模な国際的な港湾が信濃川の河口に造られているということを知り、私は非常に驚きました。

ネズミの移動や材木の移動に象徴される淳足柵ですが、今はボーリング調査などを随分いろいろなところでやっているのですが、なかなか淳足柵があったということは証明できておりません。というのは、新潟の地盤はものすごく動いているので、なかなか分からないようです。ともかく、こうした今の朱鷺メッセに匹敵するような建物が、遠く日本海を望む見晴らしの良い地にできていたのではないかと私は考えております。

この淳足柵は、どのような機能を持っていたのでしょうか。蝦夷の征討に派遣された阿倍比羅夫が、180 艘もの舟を率いて蝦夷の国を討ったという記事があります。そのときに、齋田（あきた）、淳代（のしろ）、津軽、それから胆振（いぶりさえ）の蝦夷を 1 カ所に集め、饗応して禄を賜ったという記事があります。これは、斉明天皇 4 年の記事と重複する点が多いのですが、二つの記事を併せてみると、要するに、降伏して恭順の意思を示した蝦夷を饗応した事実が指摘できるのです。そのときに、舟 1 艘と 5 色の絹が蝦夷の神様にささげられています。蝦夷の神様に舟と 5 色の絹をささげるということは、阿倍比羅夫が蝦夷に対する和平の意思といいますか、戦闘の意思がないこと、武力制圧を加えるのではなく、平和裏に和平を結ぶということを、その土地で蝦夷が祭る神に対して敬意を払うことで示そうと思ったのではないかと私は考えています。

蝦夷の信仰を尊重するということは、彼らの価値観を尊重するという意思の表明でもあったと思うのですが、そのことがどれほど蝦夷たちに安堵（あんど）を与えたかというのは、想像に難くありません。いつの時代にも、宗教戦争ほど熾烈な戦争はないと言われますが、もし彼らが自分たちの神を否定されて他の神を祭れと言われたら、それは制圧であり、価値観の転倒になっていくのですが、少なくとも阿倍比羅夫たちが蝦夷の神を尊重するという意思がここで確認できます。そこで宴会が振る舞われるのですが、宴会というのも服属儀礼ではありますが、大和王権と蝦夷の側の非常に重要な儀式的な意味を持っています。先ほどのサハリン遠征の記事でも、ロシア料理をアイヌ人に振る舞ったことが、彼らが親密になる一つのきっかけになっていて、そうした要素が関係してくるわけです。

そうした神に祭るという形を借りて交易をする、民族間の交流では、恐らく交易というのが一番重要な問題で、『日本書紀』の神功皇后摂政 46 年のときに、和から百済に使節を遣わしたときに、百済の王は和と通航したかったので、5 色に彩った絹や弓矢、当時の日本社会では生産し得なかったであろう鉄の延べ板（インゴット）を見せてくれたのです。それから、宝の蔵を開いて、自分たちと通航すればこうしたものを獲得できるのだということを見せたのです。先ほどの阿倍比羅夫の場合は、蝦夷の神に対して、舟や 5 色の絹を与えることで、大和王権の側がこれ以上の侵略を蝦夷の世界に対して行わないということを示して、大和と通航すればこれらのものを獲得できるのだということを示そうと思ったと考えることができるわけです。

この問題をもう少し詰めていくと、大変面白い資料に当たることができます。『日本書紀』の斉明天皇 6 年の条には、「阿倍氏」とあり、これは比羅夫のことだろうと思いますが、既に帰順した陸奥の蝦夷たちを乗せて、200 艘の大船団を組んでずっと日本海を北上していきます。そこには、1000 人ぐらいの渡島（わたりしま）の蝦夷がいました。この渡島というのは北海道の渡島半島のことではないかと言われているのですが、1000 人の蝦夷たちがキャンプしていた非常に大きな川の畔に至ったと書いてあります。ここは後志（しりべし）という名前になっていますが、これはアイヌ語で「大きな川」という意味だそうです。そうした大きな川の畔にアイヌの集落があって、そこに阿倍氏の 200 艘の大船団が至ったわけです。

ここで非常に大きな川であるということにも注目してほしいのですが、この土地には後に蝦夷軍の政所、つまり役所が造られるわけです。それが私は恐らく後の交易センターに発達していくのだと思うのですが、とにかくそこに行ったときに、1000 人の蝦夷のキャンプの中から、渡島の蝦夷たちが阿倍の軍団に語りかけてきたのです。何と語りかけてきたかといいますと、肅慎（みしはせ）が船に乗って大勢やって来て、私たちを殺そうとしていると。自分たちはとても肅慎には太刀打ちできないので、この大きな川を渡って阿倍軍に投降したいと申し出るのです。

そこで、阿倍の方は、迎えの舟を出して蝦夷を迎え入れ、一体肅慎がどこに隠れているのかと聞いたのです。肅慎というのは中国の伝説上の民族の名前で、中国から一番遠いところに住んでいる北方民族の呼び方と定義されています。その肅慎の軍団に攻められた蝦夷が、阿倍比羅夫の軍に投降して肅慎を討つ手引きをしているのですが、そこで肅慎の軍団はあの島の陰にいたのだということを聞き出した阿倍氏は、遣いを送り、自分たちへの降伏を呼びかけます。ところが、肅慎はこれを拒否します。そこで阿倍氏は、やおら川辺に色とりどりの絹と鉄、先ほど神功皇后のところで出てきた鉄の延べ板（インゴット）をずっと並べ、それを肅慎の船団に見せつけるのです。非常に見通しのいいところにそれを並べて見せつけたのです。

すると、沖に停泊していた肅慎の軍団の中から、鳥の羽を旗に掲げた舟がやって来ました。1 艘の小さい小舟でやって来るのですが、中に二人の肅慎の老人が乗っていました。彼らは、その浜辺に上陸すると、そこに並べてある品々をずっと丁寧に見て値踏みしていきしました。そこにあった単衫（ひとえ）の上着を取って、自分たちの着ていた着物を脱いで、その阿倍軍たちが並べていった単衫の絹を着て、また船に乗って帰ったという話があるのです。ところが、しばらくすると、彼らはまた戻ってきて、着ていた単衫を脱いで、大和と通交したらこういうものが手に入るようだと言った肅慎の軍団に見せに帰った布やインゴット

などを、もう一度浜辺に置いて帰ってしまいました。阿倍氏は何度も「もう一度考え直せ」と呼びかけたのですが、結局、彼らは応えることなく、そこで戦闘が始まり、肅慎は最後に勝てないと見るや、妻子を自ら手に掛けて殺してしまったと書かれています。

ここで、肅慎との戦闘に先立って行われた、海辺に絹や鉄のインゴットなどを置く行為というのがどのように捉えられているかということ、文化人類学の解釈で、古くはヘロドトスの『歴史』の中に、カルタゴのフェニキア人と古代リビア人との間で行われた商業行為として登場します。これを未開民族の中で行われる沈黙貿易（無言貿易）と呼びます。言葉の通じない民族同士で交渉するときに、意思の疎通がうまくいかない。意思の疎通がうまくいかない場合は、関わり合わないのが一番です。一番大事なのは物ですから、物々交換するときには一切言葉も交わさない方がいいのだということで創始された、沈黙貿易（無言貿易）と呼ばれる営為があります。結局、ここで阿倍氏は、大和王権と和平を結んで交流を持つようになれば、こういうものが手に入るのだということを示したのが、非常に美しく染めた絹であり鉄であったと考えられます。

では一体、大和の方はこの対価としてどういうものをもらったのでしょうか。非常に面白い記事があります。斉明天皇4年（658年）、阿倍比羅夫が肅慎を討って、熊の皮70枚を得たと書いてある記事です。これはヒグマの皮であろうと言われていますが、それを阿倍比羅夫は朝廷に献上します。さらに、斉明天皇5年のときに高句麗からの使いがヒグマの皮1枚を持ってきて、これを60斤で売ってやると日本側に言ったのです。日本側は熊の皮1枚が60斤というのは高過ぎるということで、その商談は成立しなかったのですが、大変な策士が一同の中にいて、ある人の家で宴会をやろうと言って、高句麗の使いを招待します。そのときに、宴会場一面に斉明天皇に献上された70枚のヒグマの皮を敷き詰めて、そこで宴会を開いたのです。高麗（こま）の使いは、日本にはヒグマの皮などないと思っていたから1枚60斤で売りつけようと思ったのですが、こんなにたくさんあるのだったらとても買ってもらえないと、ほうほうの体で退散したと書かれています。

このことはどういうことを示しているのでしょうか。日本ではヒグマの皮は生産されていなくて、肅慎の世界で生産されているものです。そのヒグマの皮を日本は喉から手が出るほど欲しかったので、高句麗が間を取りもってそれを売りつけようとしたわけです。日本側は肅慎の世界のヒグマの皮が非常に欲しかったのですが、自分たちが提供できるものは、日本の社会で生産される美しく色付けされた絹であり、鉄でした。それを交換するというのが沈黙貿易で、これは文化人類学の事象を史料の上に表現したものだと考えられています。

最初の記事に戻りますと、肅慎との沈黙貿易を行おうとした場所では、200艘の舟が停泊でき、20艘余りの肅慎の船団も隠れていました。ということは、大変複雑に入り組んでいて、風や波を避けることのできる天然の良港であったと考えられます。後にここに政所が設けられ、それが蝦夷軍の郡衙（ぐんが）になったということは、人工的な建造物が造られたということで、その機能の一つが恐らく蝦夷や肅慎との交易であっただろう、そして、これも貿易センターになったのであろうと考えるわけです。

3. 他民族間における衣服の機能

もう一度、「斉明紀」の肅慎の記事ですが、ここでは綵帛（さいはく＝色どりのある絹）

と鉄以外に重要な意味を担っていると思われるのが、阿倍側が提供した、海岸に置いた単衫の絹です。結局、この単衫の絹を肅慎の老人二人が着て帰ったということは、恐らく大和王権の側に従おうとした老人たち二人の意思を示していた、少なくとも和平をしようという意思を衣服の着用によって示したと私は考えています。言葉の通じない民族間での意思疎通は非常に難しいわけです。価値観が違い、行動様式が違います。一歩間違えば、全く同じ行為が正反対の意思の表出にも捉えられてしまう危険があるわけです。こうした言葉の通じない人々が意思を通じさせる方法の一つが、相手が着ている衣服を着用することです。それは一つには民族同化の意思を表明しようとすることがあります。日本が中国に使節を送ったときにも中国の衣服を着ました。新羅の使節が中国の衣服を着てきたことが大変日本の気に障って、新羅とは絶交しようというような議論が起こったと『日本書紀』にありますし、衣服の着用というのは非常に重要な意味を持っているわけです。そこで、この場所での衣服の機能は大きいと思うのです。

もう一つが、先ほども言いましたように、その民族が個々に信仰する神を相手方の民族が敬意を払って礼拝することです。礼拝するということは、戦闘の意思がなく、同じ価値観を共有する気があるということで、少なくとも彼らの信仰を陵辱しないという意思を表すわけです。神に何かをささげることによってそれを表現するということは、必ずその反対給付として、その神の属する共同体の側から他のものが提供される、自分たちが欲しいものを提供されるというような交換あるいは交易の性格を持っていると考えられます。

4. 交易の場としての出雲大社

こうした視点で見ていって、最後に出雲大社のことを挙げてみたいのですが、平安時代の970年に出雲の口遊（くちずさみ）というものがあまして、出雲大社は京都の平安宮の大極殿、東大寺の大仏殿よりも大きく高い建物である、天下無双の大廈（たいか）だとして書き上げられています。

出雲大社は、さまざまな資料の中に「引橋一町」とあり、一町もある長い長い階段が付けられていたと言われていました。出雲大社の高さについては、今は28mぐらいしかないのですが、かつての高さとして、48m説と96m説があります。48mとか96mはうそだろうと言われていたのですが、実は出雲大社の境内遺跡の発掘が行われまして、そこから三つの大木を金の輪で結んで1本の柱を造り、それで出雲大社の高さを支えていたことが分かりました。3本の大きな材木に輪をかけて一つの柱にしたことが証明されたのです。この造営方法は、江戸時代に本居宣長が引用している、「金輪造営図」があります。そこには、中世以前には16丈（約48m）の高さがあっただろうことの傍証として「金輪造営図」が示されているのですが、それをほぼ正確に伝えていることが分かりました。

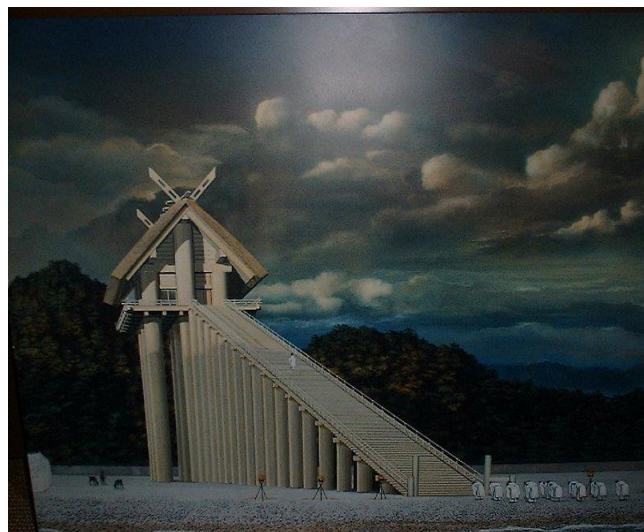




私たちは今、出雲大社と呼んでいますが、昔は杵築（きつき）大社と呼んでいました。これは、版築ともいって、杵で土を突き固めて造営するという意味を持った名前なのです。私たちは古代の神社という、三輪山などのように、山そのものがご神体であったと考えがちなのですが、杵築大社の場合、杵で土を突き固めて柱を立てて造ったということが一番の根本です。ですから、初めから人工的構築物であり、建物が前提となっている神社だということが分かります。私はこのことが出雲大社の性格を物語っていると思うのです。自然物に神が宿ると考えた古代人の心性とは全くなじまない出雲大社の建立の契機がある。つまり、まず建造物ありきという出雲大社の性格が伺えると思うのです。

私は出雲大社の「引橋一町」という記述も決して荒唐無稽（こうとうむけい）ではなくて、出雲大社がひととき高く造立された理由は、実は土地の神を祭るという行為に姿を借りた交易の場であったのではないかと考えています。つまり、日本海の貿易センターとしてこの構造物が機能したのではないかと考えているので出雲大社の高さには、望楼的な位置付けがあった。海からやって来る敵を防ぐために、防備のために高い建物が造られたのだという説があるのですが、その場合は、私は一つ大きな問題があると思うのです。もし、望楼的施設の高殿に階段が付けられていたとすれば、その階段は、人々の側、共同体の側に付けられていなければならないと思うのですが、出雲大社の階段は海の方に向かって付けられています。厳密に言うとは海ではなく、ここもラクーンなのですが、日本海からずっと入り込んできた潟湖に向かって付けられておりました。

ここには波も来ないから、日本海を経由してさまざまな民族、近隣の人々が来られるのです。出雲大社の高さはさまざまに考えられているのですが、社殿の上から見ると、ちゃんと日本海が見える位置になっているそうです。出雲大社のこの姿こそが、先ほどの稲吉角田遺跡の海から寄り来たる人々がこぎ寄せる階段の上に、恐らく祭られた淀江の人々の神の姿と重なる部

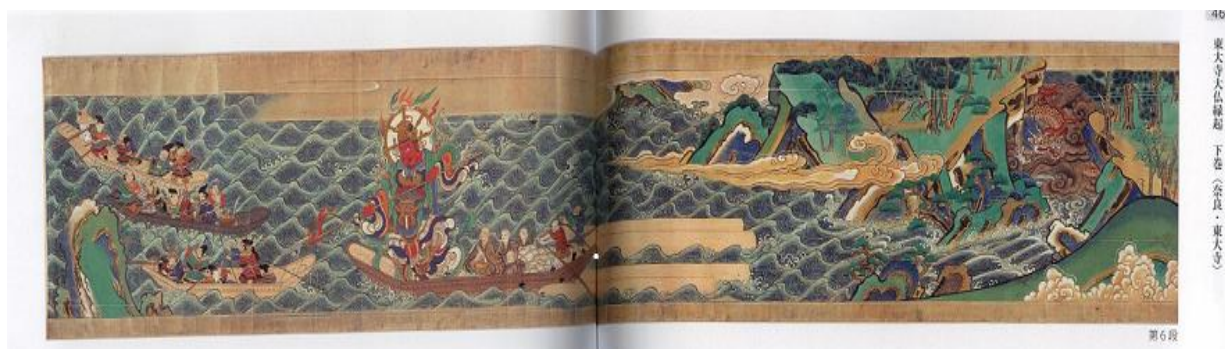


分があったのではないかと私は思っております。ここで描かれている人物が身に着けているのは、鳥の羽とも解釈されているのですが、少なくとも非常に儀礼的なものです。戦いを挑むのであれば、もっと軽装でいるはずなのですが、正装した様子で神の元にこぎ寄せて、恐らくその神に何かをささげるという形で交易をした、そうした見晴らしの良い高殿が造られたのではないかと考えています。

日本海のさまざまな港は河川交通の拠点であり、潟湖、あるいは河口港を中心として展開していったと考えられるのですが、出雲大社も海に向かって環日本海交通のランドマーク的な役割も果たしていた。それが故に大きく建造されたのではないか。そうした姿が角田の土器絵画に描かれたり、『日本書紀』の中に淳足柵が難波宮の造営と同じような形で表現され、ネズミの移動や浮き木の移動という形で作られていったのだと思っています。

出雲大社の場合にもう少し触れますと、出雲大社には 48m 説や 96m 説があるのですが、あまりにも高く造られたために何度も転倒し、すぐに壊れるのです。そうになると、必ずちゃんと立て直します。ところが、立て直すときにまた膨大な材木が必要になってきます。そのときの記録の一つとして、1109 年に倒壊して、永久年間に大社が造営されたという記事があるのですが、このときに、出雲大社に近い稲佐の浜に大木が 100 本海から漂着したという記事があるのです。最大で 10 丈（約 16m）の長さがあり、直径が 7 尺（約 1m）の材木が 100 本も流れ着いたということです。もっとすごいのは、長さ 15 丈と直径 1 丈 5 尺の材木も、大蛇がまとわりついて、大蛇が守って因幡の上宮というところに流れ着いたというような話があります。

出雲大社ほどの建造物を造るには、大変な量の材木が要るわけで、それは出雲の斐伊川からずっと材木を流したという記事もあるのですが、出雲国一円の材木を集めただけでは足りず、日本海沿岸から海路を通じて用材の材木を調達・供給したのではないか。そうした事実をこの史料は語っているのではないかと考えております。こう見てくると、淳足柵が造られたのは 7 世紀のことですし、平安末期、12 世紀の出雲大社の伝承と時期は隔たっているのですが、壮大な規模の建造物だったからこそ、こうしたストーリーが出来上がっていったのでしょう。



東大寺大仏縁起 下巻（奈良・東大寺）

もう一つは、東大寺大仏縁起絵巻に描かれています。重源による東大寺の大仏殿の再建のときに、海上輸送しようとする材木に大蛇がまとわりついて、神の祝福を証明したというような記述が出てきます。要するに、大規模な建物の建造には、材木を海に流すという伝承が不即不離に結び付いているようで、そうすると、東大寺の大仏殿も出雲大社も淳足柵も、同じような大規模構造物であった可能性があります。そして、決してこの三つだけ

ではなく、日本海には長瀬高浜遺跡など、さまざまなところにそうした建物があります。それから、縄文期のものらしいのですが、能登半島には真脇遺跡という非常に高い、高樓かどうか分からないのですが、材木を建てていたということが知られています。そうした構造物が、環日本海の交易を支えたのであろうということを結論にして、私の話を終えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



朱鷺メッセから新潟港